

## 「真夜中の本屋・・・美について」

「ウチヤマ君、いい歯医者になろうと思ったら、まずそのネクタイをなんとかしなきゃダメだよ」。それがある勉強会でW氏が私にかけてくれた最初の言葉だった。今から40年ほど前のことである。私は駆け出しの歯科医で、勤務医として就職はしたものの、国家試験後の虚脱感の中でこれからどこへ向かったらいいのか迷っていた時期だった。

W氏は同窓の先輩だった。私よりも14歳も年上なのに、なぜかよく私を誘ってくれた。開業地が六本木ということもあって、たびたび食事やコンサートにもお供させていただいた。

「一流の治療をしようと思ったら、一流のものを身につけ、一流のものを食べ、いつも一流の絵や音楽や小説や映画に接しなければならない。そして何よりも『美』に関して鋭敏でなければいけない。」それが口癖だった、実際、W氏は世の中の美という美について、驚くほど博識だった。

ちょっと気取った態度で、時に皮肉を交えて話す彼を敬遠する人たちもいたと思う。私はといえば、一流とは程遠い田舎町で育ち、節約家の両親から最低限の生活費で学生生活を送ってきたから、卒後間もなくして出会ったW氏の言葉は、彼が醸し出す豊かで都会的な華やかさと相まってとても魅力的に思えた。少し大げさにいえば、そのひと言ひと言がまるで砂に放たれた水のように心に染み渡った。それまで培ってきた理系の知識が、「美」を理解するのに全く通用しないことにも気づかされた。

唐突な比喩に思えた冒頭の「ネクタイ」についての言葉の意味を理解したのは、しばらくしてW氏がボードリアール（フランスの哲学者）の消費記号論について熱く語ってくれたときだった。「高度な消費社会において人が求めるものは、モノそのものの使用価値ではなく、商品に付与された記号（ブランド）である。歯にも「機能」以外に「審美」という別の記号がある。噛めることは最低条件、患者さんは美しさも求めているのだから、歯科医は美に対してもっと鋭敏でなければならない。つまりおしゃれも大事ということ」。なるほど、「ネクタイと歯科」の関係って、このことだったのかあ。

ある時、いつものように六本木で食事をしてからW氏が向かった先はなんと書店（今はなき青山ブックセンター六本木店）だった。時刻は深夜の12時。そんな時間に開いている書店があるとは夢にも思わなかった。迷わず向かったのは「哲学」と「現代思想」のコーナーだった。あれもこれもと購入を勧められた書籍はどれも高価で、書架の前でたじろいだことをよく覚えている。思い起こせば、それらすべてが“思想”の世界のスタンダード本だった。「美」を解するのに哲学や現代思想（とくに「消費記号論」や「構造主義」）が不可欠なことを教えられた瞬間だった。

W氏の視点は、一見冷徹なようで実は優しく柔らかく、文学的な表現のなかに、身近な比喩や歯科医療の秘訣などが散りばめられていて、それを反芻することで私は医師としてだけでなく、教養人としての基礎を学んだと言っても過言ではない。実践的な臨床のテクニックについても多くを教えていただいたし、何よりも文章の書き方について、学術誌への投稿などを通して一から指導していただいた。その後、目指す歯科医療の形は大きく乖

離してしまったが、彼が私にとって「人生の師」であることに変わりはない。

「人間が若い時に何かを学ぶということは、たとえその期間が、その人の人生の中のほんのひと時であったにせよ、教える人の誠実な姿勢と、学ぶものに素直な姿勢があれば、長い歳月が過ぎた後であっても、その教えは学んだ者の胸の中に刻まれて消えることがない。」

(伊集院静「悩むなら、旅に出よ」2017、小学館 より)

あれから長い年月が経った。今でもW氏の教えは、伊集院氏の言葉さながらに、いまでも私の心の奥深くに刻まれて消えることはない。

2020年5月23日 記